

周旋家日記⑩「PBL シンポジウム発表報告『PBL ベースド大学改革』－その1－

乾明紀

今回は、平成26年5月17日におこなわれた日本PBL協会主催のPBLシンポジウムの発表内容の前半部分について報告します。実は、平成26年5月16日の23時25分に長男が生まれたため、シンポジウムの会場には行くことができず、なんと産婦人科の病室からの発表となりました。

1. はじめに

佛教大学の職員から大学の連合体である大学コンソーシアム京都への出向などを経て、京都造形芸術大学の教員となった私は、2013年4月より京都光華女子大学のキャリアセンターの教員となり、キャリア形成学部の改組に伴うPBL（Project Based Learning）の導入に関与した。PBLとは、プロジェクトという計画と実行を伴う実践的な取り組みをおこないながら、科目の習得目標である知識や態度を学習する方法論のことである。大学職員時代からこのような実践的な教育方法の必要性を感じ、いくつかの活動を経て、現在PBL科目を担当している。今回の報告では、大学職員時代に携わったPBLに類似する活動と教員として携わったPBLによるカリキュラム改革の取組について報告する。

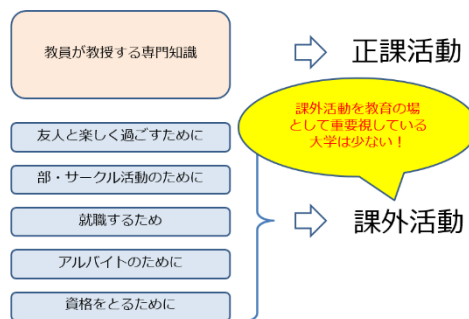
2. 佛教大学の職員時代に考え実践したこと

佛教大学の職員であった2000年ごろ、学生課で課外活動支援を担当していた私は、学生からの相談に対応する中で、学生リーダーが組織運営上の様々な課題に悩みなが

らクラブやサークルを運営していることがわかった。全国大会を目指す体育会クラブから学園祭での発表を主な活動とする文化系のサークルまで様々な団体のリーダーが組織運営上の課題を抱えながらも熱心に課外活動をおこなっていた。一方、大学側は、正課活動と課外活動は大学教育の両輪と言いながらも教育的な支援はほとんどしてこなかった。

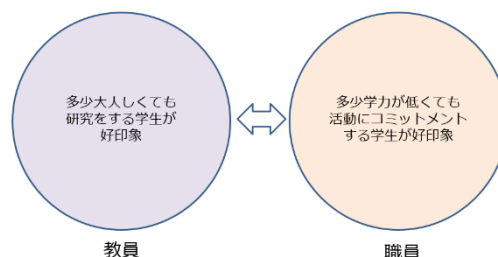
学生が大学に来る目的は

(大学職員ジャーナル, 2003)



多くの大学で課外活動の教育効果は認められていたが、「研究による教育」というモデルがあり、当時は、正課教育外に構造化された教育の機会はほとんどなかった。インターシップなどもなかった時代である。社会人として7.8年目になろうとした私は、組織における学びの意義を感じており、職員として、課外活動を基盤とした教育活動も必要だと強く思ったのである。

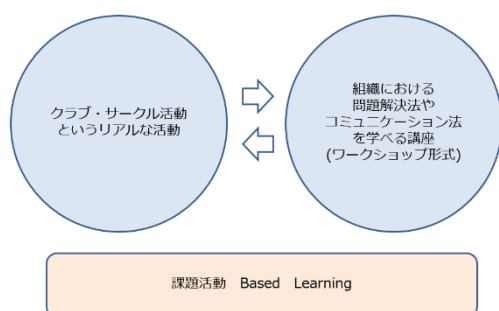
教員と職員の目線の違い



そこで、学生部長を説得し、『学生リーダー研修会』¹（乾，2003）というものを企画提案した。これは、課外活動団体に所属する学生を対象に、企業がおこなっている管理職研修や新人研修を学生用にアレンジしたもので、企業研修を担当する講師を招いておこなった。

なお、このときの講師の姿を見て、「自分もいつかこのように学生を勇気づけたい」と思ったことが今のキャリア形成に大きく影響している。

学生リーダー研修会のねらい



3. 大学コンソーシアム京都時代に携わったこと

大学コンソーシアム京都時代には、初代学生交流事業部の総括主幹となり「京都学生祭典」の第2回以降の推進を担当した。この祭典は、学生の手で京都を活性化しようと、京都経済同友会が音頭をとり、大学コンソーシアム京都が賛同することで始まったものである。私が担当する前年（2003年）におこなわれた第1回目は、立命館大学に人気歌手である倉木麻衣さんが在籍し

ていることもあり、彼女のスペシャルコンサートを目玉に10万人以上の来場者を平安神宮内外に集め、大いに盛り上がった。この成功を受け2回以降の推進（学生支援）を私が担当したのである。当時の事務局長から10万人以上の来場者と運営資金1億円の獲得を目指すように指示されたが、私が引き継いだ時点における学生実行委員の人数はなんと7名であった。この人数の少なさに愕然とし、さらには、学生はタレントに頼らない祭を指向したため、前途多難な船出であった。7名の学生を鼓舞し、ゴールデンウィークまでに100名の学生を募り、さらに学生を増やしつつ目標の運営資金の獲得も達成し当日を迎えた。

残念ながら、第2回京都学生祭典は、台風24号の上陸に伴う警報発令により屋内企画の全てが中止となる悲運に襲われたが、起死回生を目指した第3回京都学生祭典は、創作した「京炎そでふれ！」踊りの成功などもあり、述べ12万8千人の来場者を集めた。挨拶に訪れた京都市長（当時）は、それまでの非協力的であった見解を180度転換し、「京都の三大祭である時代祭、葵祭、祇園祭に次ぐ4大目の祭にしていこう」と挨拶し、京都府知事はじめ多くの関係者がこの成功を喜んだ。この年の成功により、本祭典は大きく発展し、途切れることなく継続し、今年で12回目を迎える。



（画像は、京都学生祭典WEBサイトより）²

この京都学生祭典の成功により、学生の

¹ 乾明紀,受身でなく、コンサルタントとして～学生の「学びと成長」のために大学職員は何ができるか,大学職員ジャーナル第6号,高等教育研究会, pp45-46, 2003年3月

² <http://www.kyoto-gakuseisaiten.com/>

可能性や学生とプロジェクトを実践する際に大切なことが可視化された。主なものとしては、①学生は、実践的な学びを欲している、②学生は、組織や社会に貢献したいと思っている、③学生には、新しい価値を生み出すパワーがある、④学生の力に期待している地域や組織は多い、⑤学生にプロジェクト・マネジメントを修得させることができれば、大きな事業でも可能である、⑥大切なことは学生を主役にさせること、などであり、私にとっても大きな学びとなった。

4. 京都光華女子大学へ

John W. Thomas (2000)³は、PBLに関するレビュー論文の中で、PBLには①中心性 (centrality)、②掻き立てる課題 (driving question)、③建設的な調査 (constructive investigation)、④自律性 (autonomy) ⑤現実性 (realism)、という5つの基準が含まれていると述べているが、この定義からすると、学生リーダー研修会も京都学生祭典も課外活動であり、「中心性」の基準に該当しないものであった。大学における教職員の壁は厚く、教育課程に直接的に関することはなかった。

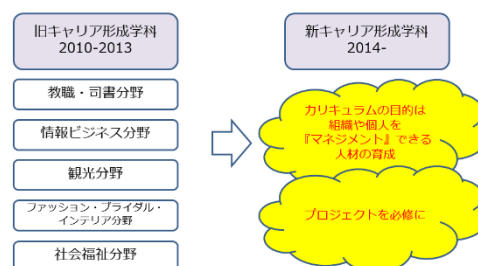
PBLの5つの基準 John W. Thomas (2000)

- ① 中心性 (centrality)
- ② 掻き立てる課題 (driving question)
- ③ 建設的な調査 (constructive investigation)
- ④ 自律性 (autonomy)
- ⑤ 現実性 (realism)

その後京都造形芸術大学のプロジェクトセンターに所属する教員となり、芸術系分野において、中心性の基準を満たすプロジェクトをいくつか実施したが、私自身が学科に所属することはなく、傍流としての関わりであったとも言える。その後、立命館大学に籍を移し、「プロジェクトベースの学習者中心マネジメント方法の研究」をおこなっていた2013年に京都光華女子大学とご縁を持つこととなった。同校の教員募集は、同校のキャリア形成学科のカリキュラム改革に伴うものであった。

京都光華女子大学では、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム (現代GP)」⁴の採択に伴い人間関係学科を改組し、2010年度にキャリア形成学科を設置した。総合的社会人基礎力の養成を主たる教育目標としてスタートしたが、2014年度に全学的な学科改組により社会福祉分野が健康科学部の学科として独立することが決まり、キャリア形成学科は新しいカリキュラムで生まれ変わることとなった。

学部学科改組 (カリキュラム改編)



新生キャリア形成学科では、女性の社会

³ Thomas, J.W. (2000). A review of research on project-based learning. San Rafael, CA: Autodesk. www.bobpearlman.org/BestPractices/PBL_Research.pdf

⁴社会的要請の強い政策課題に対応した取組の中から、特に優れた教育プロジェクト (取組) を選定し、財政支援を行う文部科学省の高等教育支援事業

進出が求められる時代に対応し、「組織や個人をマネジメントできる人材の養成」を教育目標と定め、さらには、能動的な学習者を育成すべくプロジェクト科目を必修科目としたカリキュラム構築を目指した。私は、この学科改組に伴う新しいカリキュラムづくりを支援すべく、2013年度にこの大学に異動したのである。(つづく)